

しよううつしあさがおばなし

## 生写朝顔話

### 〔解説〕

天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）萃松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ道いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

### 〔あらすじ〕

宮城阿曾次郎と芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪は、京の宇治で出会い恋に落ちます。折しも阿曾次郎は鎌倉出張の命を受け、別れ際、朝顔の歌を扇に書いて深雪に与えました。急遽本国へと引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然阿曾次郎と再会しますが、それも束の間、二人は再び別れ別れとなり、国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐ様言い渡されます。駒沢次郎左衛門とは、伯父の養子となり名を改めた宮城阿曾次郎だったのですが、それを知らぬ深雪は、思い余って家を出、阿曾次郎を探す旅に出ます。

放浪の末、辛苦から盲目となった深雪は、三味線片手に唄を歌って日々をしのいでいました。やがて深雪を探す乳母浅香と浜松で出会いますが、浅香は悪漢から深雪を守るため深手を負い、島田宿の父を尋ねるように言い残して息絶えます。

〈宿屋の段〉一方、駒沢次郎左衛門は岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊ります。岩代は同じ藩士であるものの悪人の一味で、しびれ薬で次郎左衛門を亡き者にしようとして企てますが、宿屋の主人徳右衛門の機転により失敗します。はからずもこの宿で盲目姿の深雪と再会した次郎左衛門でしたが、任務の途中とあって、それと明かすこともできず、万感の思いで深雪の演奏する朝顔の唄を聞き、徳右衛門に目の秘薬を言付けて出立するのです。次郎左衛門が残した扇から、実は阿曾次郎であった事を知った深雪は慌てて後を追います。

〈大井川の段〉阿曾次郎を追って大井川までやってきた深雪ですが、一足遣いで大井川は川止めとなってしまいました。失望の果て入水しようとした時、徳右衛門と下僕関助がかけつけ、深雪の祖父が大恩を受けた故主であると知った徳右衛門は、甲子生まれの男子の生き血とともに飲めば薬効ありという薬を深雪に飲ませる為に切腹、薬を飲んだ深雪は薬効により目が開きます。

その後、深雪は次郎左衛門と再会し、晴れて夫婦となるのでした。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

## 宿屋より大井川の段

「もと私は中国生れ、様子あつて都の住居。すまい一年宇ひととせ治の蛩狩りに焦れ初めたる恋人と、語らふ問さへ夏の夜の、短い契りの本意ほんいない別れ、ところ尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ国の迎ひ。親々にいざなはれ難波の浦を船出して、身をつくしたる憂き思ひ泣いて明石の風待に、たま／＼逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹き分けられ、国へ帰れば父母の、思ひも寄らぬ夫つま定め。立つる操を破らじと、屋敷を抜けて数々の憂き目をしのぎ都路へ、登つて聞けばその人は、東の旅と聞く悲しき。またも都を迷ひ出で、いつかは廻り逢坂の関路をあとに近江路や、身のをはりさへ定めなく、恋し／＼に目を泣漬し、物のあいろ

も水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、いつの世いかなる報ひにて、重ね／＼の歎きの数、憐れみ給へ」  
とばかりにて、声を忍びて歎きける。

深雪はなにか気にかゝり、座敷しまうてうと／＼と、また立帰る切戸のうち、徳右衛門目ばやに見て、  
「ヲ、朝顔か、遅かった。宵のお客様がもう一度呼びにやってくれいとおっしゃつたれど、清水へ往たと聞いたゆゑ、お断り申したれば、今の先お立ちなされた。しかしまあ悦びや。大枚のお金と扇、また結構な目薬まで、わが身に遣つてくれいとお預けなされたわいの」  
「これはマア／＼、冥加にあまること。お礼申さいで残り多い。が申し旦那様。この扇になんぞ書いてはござりませぬか。ちよつと見て下さりませ」

「ヲ、ドレ、エ、金地に一輪朝顔。露の干ぬ間が書いてある。裏に宮城阿曾次郎事、駒沢次郎左衛門と書いてあるぞや」

「エ、あの宮城阿曾次郎事駒沢次郎左衛門とその扇に」

「オイノ」

「ハア、」

『はっ』とばかりににわか仰天。

「エ、知らなんだ、知らなんだわいなあ。道理でよう似た声と思うたが、そんならやつぱり阿曾次郎様であつたか。申し、く、旦那様、そのお客様はいつお立ちなされたえ」

「ヲ、今の先のことぢやが、わが身はまたお馴染みか」

「エ、馴染みどころか、年月尋ぬる夫でござんすわいな。かういふうちも心がせく。追付いて、たった一言」

と行かんとするを、引止め、

「ア、コレ、マア、待ちや。エエ、折悪う雨も降り出し、この暗いに一人はあぶない」

「イエ、たとえ死んでも厭ひはせぬ」

「サ、それはそうでもめくらの身で、あぶない、く」

「イヤ、放して」

と突退け、匆退け、杖を力に降る雨も、いつかな厭はぬ女の念力、跡を慕うて追うて行く

名に高き街道一の大井川、篠を乱して降る雨に、打ち交りたるはたたがみ、漲り落つる水音は物凄くもまたすさまじき。夫を慕う念力に道の難所も見えぬ目も、いとはぬ深雪が、こけつ転びつ、やうくく、に川の傍、

「ノウ川越たち。駒沢次郎左衛門様といふお侍。もう川をお越しなされたか。まだか聞かして聞かして」といふ声さへも息切れの、声に川越口々に

「ヲ、その侍は今の先渡った。ガにはかの大水で川が止った」

「ヤアナニ、川が止まった。ハ、ア、悲しや」

と張詰めし力も落ちて伏転び、前後不覚に泣きけるが、また起上がって見えぬ目に、空を睨んで。

「天道様、エ、聞こえませぬく、聞こえませぬわ

いなあ。この年月の艱難辛苦もどうぞま一度その人に逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とてはないものを、けふに限つてこの大雨。川止めとは、く、エ、なにごとぞいの。思へばこの身は先の世で、いかなることの罪せしぞ。さてもく味気なや、焦がれ焦がれたその人に、逢うても知らぬ盲目の、この目はいかなる悪業ぞや。夫の後を恋ひ慕ひ、石になつたる松浦瀉、ひれふる山の悲しみも、身に比べては数ならず、三千世界を尋ねても、こんな因果がまたと世にあるべきか」

と口説き立て、わつとばかり泣く深雪。露の干ぬ間の朝顔も、山田の恵みいや増る、茂れる朝顔物語、未の世までもいちじるし。